

平成21年(行コ)第213号 八ッ場ダム公金支出差止等(住民訴訟)請求控訴事件

控訴人 深沢洋子ほか37名

被控訴人 東京都水道局長ほか4名

証 拠 説 明 書(甲B第179～180号証)

2012(

東京高等裁判所第5民事部 御中

控訴人ら代理人弁護士

同弁護士

号 証	標 目	(原本・ 写の別)	作 成 年 月 日
甲B第179号証	意見書(「中規模洪水から構築された計算モデルが大規模洪水には当てはまらないことについての補足意見」)	原本	H24.8.1
	立 証 趣 旨		
	<p>原告・控訴人ら弁護団は、関准教授に対して、日本学術会議におけるピーク流量毎秒2万1100m³とする検証結果について、①中規模洪水のたパラメーターで大規模洪水を推計すると過大な計算値が出るとされてカニズムが解明できるか、②いわゆる現行モデルと新モデルによる流出時の洪水の再現計算であるところ、両モデルでは、飽和雨量その他異なり、ハイドログラフの形状もかなり異なっているのに、ピーク流量だけ果となっている。こうした計算手法から再現された計算の精度等についてをなすべきか、などの問題について見解を求めた。</p> <p>これに対して、関准教授は、本意見書を作成し、①のテーマについては中規模洪水で得られたパラメーターを用いて、大規模洪水を推計するに学術会議で慣行的に用いられている最終流出率を「1.0」として計算し、流出率は「0.7」程度に収まっているのであるから、飽和雨量の値の2倍大規模洪水では、計算と実流量との乖離は極めて大きくなると図をもって、②のテーマについては、中規模洪水で設定されたKあるいはPという大規模洪水の推計を行うと実績洪水よりも過大な計算値がでること科会委員から指摘されていることだと指摘した上、同一の洪水の再現計雨量とK、Pなどのパラメーターをすっかり取り替えて、その結果ピーク流同一になったとしているが、総洪水流量は17%近くも低減している事実(リム化)からすれば、同一の洪水の再現計算とは見えず、ピーク流量を維メーターの操作の疑いを禁じ得ないとされた。</p>		
甲B第180号証	関良基準教授経歴書	原本	H24.8.1
	立 証 趣 旨		

関良基拓殖大学准教授の経歴を証する。

(平成24)年8月2日

土 高橋利明

谷合周三

作成者

関良基

る利根川水系の
再現計算で得られ
ているが、この計算メ
計算はカスリーン台
のパラメーターも
は一致している結
こは、如何なる理解

、飽和雨量程度の
について、国交省や
れば、現実の河道
、3倍の降雨となる
こ指摘された。そし
パラメーターを用
は学術会議でも分
算であるのに、飽和
量は現行モデルと
(ハイドログラフのス
維持するためのパラ

関良基

